平成 28 年度　第２回体罰を許さない学校づくり検討委員会要旨

１　日　時　平成 28 年 12 月 19 日（月）15:00~17:00
２　場　所　神戸市総合教育センター7 階　701 会議室
３　出席者　11 名　　※傍聴者１名
４　次　第　（１）指導部長あいさつ
　　（２）委員長あいさつ
　　（３）体罰に関わる本市の状況・研修等の取組について
　　（４）指導課長あいさつ
５　主な発言内容
＜指導部長あいさつ＞

＜委員長あいさつ＞
昨日のニュースでは、部活動中の体罰について大きく取り上げられていた。社会では重大事故であるという認識であり、まだ体罰の撲滅には至っていないという現状を表している。教育現場に携わるものとして、体罰は絶対に許されないという大前提のもと、法に基づいて、心身ともに健康な子供たちの育成や、資質を育むことが求められている。子供に対する愛情、教育に対する情熱などの普遍的な根幹的な部分は堅持しつつ、現状や社会の変化を把握し、柔軟な対応をすすめ、教育の中で反映させていくことが重要である。様々な場面で個々の違いを認め合う学校づくり、社会づくりを目指さなければならない。教員の資質向上を図りながら、PTA、地域、教育委員会とも連携し、信頼関係、協力関係を築きながら子供たちの教育環境がよりよくなるように努力しなければならない。

＜体罰に関わる本市の状況・研修等の取組について＞
（小学校）教員の厳しい指導に対して子供が納得していない状況がある。指導後も精神的な苦痛だけが残っているのではないだろうか。経験を積んだ教員は、子供たちと信頼関係ができているので理解してもらえるだろうという思い込みと、現実の子供の思いのずれから、言葉の暴力や体罰につながっていくと思われる。事例研修のような形のものは定期的に学期に一回、もしくはその都度喚起するような形で実施している。より具体的な内容のものであれば、教員の振り返りにも役立つ。
（中学校）資料を使って、まとまった研修の時間をとるのは現状では難しい。学期末、夏休み、職員朝礼の時間等に資料を使って具体的な事例やそれに対する処罰を紹介する中で、教員への意識付けを図っている。行事、学期末など、教員が忙しくなる時期に、職員室の雰囲気を察知して、管理職として適切な言葉かけをしている。教員が自分の指導力のなさを感じている場合には、自分自身を卑下し、力づくで子供たちを指導しようという気持ちにならないように、まずは教員の指導を肯定的にとらえ、精神を安定させて子供たちと向かい合えるようにしている。その日々の声かけと、タイムリーな研修が大事である。
（高等学校）他府県でも起こっている事案があれば必ず紹介する。6 月と 11 月に、学校生活アンケートをし、教員の指導についての記述があれば、管理職が直接担任と話をするというようなこともしている。体罰についてはあってはならないと十分に浸透している。ただ、生徒のアンケートで気になるのは、だめなことをしている生徒に対して叱る先生が少ないということである。神戸市では様々な教育環境についてサポートしてもらっているが、長時間労働をすれば心身ともに健康のバランスが崩れるので、教員の勤務時間も含めたバックアップをしてもらうことが、心に余裕をもつことにつながるのではないかと考える。
（特別支援学校）一律に一つの教室に集まって学習をすることはなく、ひとりひとりの障害の特性に合わせた接し方を工夫することが日々行われている。また、普通に会話ができる子供やそうでない子供もいる。会話が十分に成立しない子供たちには、何が苦痛で、どう接することがよいのかを推し量ることが教員に求められている。教員がごく普通にしゃべっている少し大きめの声そのものが苦痛になっていることもある。これらをどう理解していくのかということが特別支援学校の教員としての課題である。実際、子供たちにはアンケートはとれないので、その分、教員がしっかり子供たちを理解していかなければならない。様々なケースに対応するため、学校としての体制作りが重要であり、研修は繰り返し行う必要がある。
○体罰はあってはならないものだと思う。しかし、先生方の熱心な指導は必要ではないのかと考える。学生時代に叱られたり、厳しくされたりした経験が、今の自分には必要だったと思っている。今の

教育は子供主体という意味を違った形にとらえているのではという危機感をもっている。特別支援学校の子供たちの中には学校での出来事を話せない子供がたくさんいる。保護者が子供の様子がおかしいと感じれば、その都度学校に行き、先生と話をし、授業の様子を見るという確認をしている。最近、先生同士の連携が少なくなって寂しく感じるという意見も聞いている。特別支援学校は指導法も違ってくるので、それに特化した研修が多くあればいいと思う。

○教員の指導に子供が納得しないのは、子供のことを察すること、配慮することなどのセンスが足りないことから起こると考える。そのセンスを磨くために、スキルを身に付ける必要がある。叱らない教員がいるということについては、その状況を放置していることに他ならない。子供たちに分かるように叱るということが必要になってくる。教員がやっていることは常に正しいことではなく、常に学びの意識をもたなければならないと考える。また、指導力がないことに悩むだけではなく、どうすればいいのか前向きに考えることが大事である。管理職として、別の指導方法の在り方、視点を与えていくということも大事である。子供とのコミュニケーションの取り方、児童理解、生徒理解ということも大切である。

○体罰が起こる現場というのは、授業の場、部活の場、生徒指導の場といろいろある。教員が単なる教えるということだけにとどまらず、それぞれの場面でいかに賢く教えるかということを考えてほしい。教員間でそういった賢さの交流ができたらいいと考える。

○学校には、これまでにたくさんの研修を踏まえ、様々な取組をすすめていただいている。しかし、教員にゆとりがないように感じる。また、教員同士の指導方針が違い衝突する場面も見たことがある。学校長が、どのような方向で指導するのか統一感をもって学校運営をしていただけたらと思う。義務教育の中では共同生活の大切さを教えていただくものだと思っている。だめなものはだめという方向性で進んでいただきたい。教員のゆとりについては人員配置も含め、神戸市として適正な人数、適正な形でやっていただければありがたい。我々PTA としても、保護者に対して義務教育とは何かということを伝えていく中で、先生たちを支えられるよう努力していきたい。

○先生方の勤務時間の話があったが、自分の子供が通う学校はもっと長時間に及んでいた。アンケート集計の結果の中に、「子供は担任の写し鏡」と書かれていた。確かにクラスによって担任の先生のカラーはあると感じている。その中で、子供の先生への言葉づかいが気になる。子供一人一人違うので、全員を理解するためにコミュニケーションをとる力が本当に大切であることを改めて感じた。先生方の一言は何気なくても、年頃の子供たちにとっては、傷つくこともあることを理解してほしい。

○教員の待遇の改善というのが非常に重要ではないか。担任 1 人に対して子供が 30 名、40 名というのもどうかと思う。もっと教員同士がかかわりあって生徒指導ができるような環境が整えばいいと思う。また、教員という職業が子供たちのあこがれの一つになればと考える。また、待遇改善をしていくことが先生方のゆとりにつながるのではないかと考える。神戸市で教員になりたいと思えるような子供たちが増えてくれば神戸の教育も良くなっていくと考える

○産休に入るなど、事情で年度中に担任が変わることがある。子供の不安感をできるだけ少なくするような配慮も必要である。

＜委員長より＞

それぞれの立場から貴重な意見がたくさん寄せられた。これらの意見を現場の先生方に伝え、よりよい教育が実践されるよう望む。教育者というのはもともと大変なものである。神戸市出身の嘉納治五郎先生が、「教育者は胸を張れ。」と言った言葉を思い出した。様々なスキル、条件の面を含めて大変な職業に従事していることに自覚をもち、胸を張れと言ったのだと思う。先生方の勤務時間等を改善しつつ、不安感への支援、特に地域、PTA、学識経験者の方からの様々な知恵、サポートをいただきながら研修をすすめ、教育者としての資質を磨くことが大切だと考える。神戸は震災を経験し、このような貴重な意見が様々にみられる暖かい人間関係がでている地だと思う。その利を活かしてよりすばらしい教育が展開されることを強く信じている。

５　事務連絡

６　閉会あいさつ